

赤米ニュース

第 305 号

(2022 年 8 月 31 日)



東京赤米研究会

〒186-0003 東京都国立市富士見台 4-11-13 メゾン国立 201 長沢方 (Tel.042-577-6855)

8 月の赤米作り-----	2
おしらせ-----	3
おたより-----	7
『赤米ニュース』第 300 号記念報告：赤米の利活用（V）-----	7
表紙解説：国分寺市の年中行事⑧―戸倉満福寺の施餓鬼法会――	8

[2022 年版赤米栽培マニュアル]

8月の赤米作り

●8月の赤米作りのポイント

盛夏の頃となりました。ジリジリと照りつける真夏の太陽、いまや日中の最高気温 34～35℃は当たり前となってしまうすさまじい酷暑、そして本当に何とかしてもらいたいほどの連夜の熱帯夜地獄。東京の夏を乗り切るのは並大抵のことではありません。それは人間だけでなく赤米稲にとってもそうで、あまりに暑過ぎる夏は、稲にとってもつらいのです。植物は自ら動くことができませんので、より過ごしやすい環境を、人間が作ってやらなければいけません。そこで今回は、暑さ対策ということを少し考えてみることにしましょう。

また、この時期は赤米稲の背丈も、もうかなり大きくなっているはずですので、今後の台風襲来期に備え、風除け対策の強化ということも忘れてはいけません。赤米稲の植物体の内部ですでにこの頃、稲の花の幼体が形成されており、8月の赤米稲はいわば妊娠初期の母親のようなもので、大事な時期を迎えています。大切にいたわってやりましょう。

●酷暑対策と日除け

連日 30℃を越える日が続きますと、赤米の苗は一通りの分けつ活動を終えて、これ以降はぐんぐんと草丈を高く伸ばしていきます。8月の時点での草丈は約 80～90 cm、時には 120 cmを越すことも珍しくありません。通常の稲よりも、ずっとノッポなことに気づかれることでしょう。大昔の稲はこんな姿をしていたんだよ、と子供たちには説明してあげて

下さい。現在、農家で作られている稲は風倒を防ぎ、稲刈りをしやすくするために、長年の品種改良を通じて、あのように背丈の低い稲になっていったということなのです。

ところで、いかに稲が熱帯原産の植物であるとはいえ、過度な暑さはやはり苦手です。赤米稲の苗が真夏の強い陽射しを受け、茎や葉の周辺部分の気温が一気に上昇して、時に 35～40℃にもなることがあっても、決してへこたれることはありませんが、問題は土の温度です。バケツ田んぼの土中温度があまりに上昇し過ぎることは、決して好ましいことではなく、むしろ絶対にそうなることを避けるべきです。対策としては、段ボールなどで日除けを作り、バケツやプランターの回りを囲って、土の部分だけ直射日光が当たらないようにしてやるとよいでしょう。また、バケツやプランターを時々回したり、位置を動かして角度を変え、まんべんなく稲の地上部に日が当たるように配慮してみてください。

庭の土の上にバケツ稲を置く場合はあまり問題はありませんが、マンションのベランダやビルの屋上などでは床がコンクリート敷きになっているため、太陽光線の照り返しや熱伝導によって、異常な高温になることがよくあります。コンクリートの熱が直接、バケツに伝わらないように、バケツやプランターの底に板や発泡スチロール片などをはさんで敷き、断熱材にするのもよい方法です。クーラーのファンから排気される熱風が、苗に直接当たったりするのもまずいことです。そういうことのないように気をつけることも大切で、室外機から極力離れた位置にバケツを置くようにしましょう。

●水の管理について

この時期のバケツの水位は、かなり深めの状態で維持しますが、水の腐敗や藻類（アオコ・アオミドロ）の発生には十分注意して下さい。時折はまるごとそっくり水を換えてやって下さい。苗の成長が思わしくなかったり、急に元気を失ったり、葉がダラリとしおれたり、葉先が黄色くなって枯れかかったりした時は赤信号です。水や土が腐敗して根腐れを起こしている可能性がありますので、そういう時には短期間の「中干し」を時折やってみるとよいでしょう。「中干し」とは、バケツの水をすべて抜いてしまい、土をできるだけ乾かして、地表面に太陽光線を十分あて、紫外線による殺菌をおこなうことをいいます。

本格的な水田稲作でも、盛夏から初秋にかけて急に稲が生育不良を起こすことがよくあり、農家ではこれを「秋落ち」と呼んでいますが、多くの場合、土中でガス発生による稲の根の損傷が、その原因といわれています。ガス抜きパイプの中が土で詰まっていないかということにも、つねに気をつけて下さい。

その他の対策としては、害虫と強風による被害への備えということになるでしょう。よく稲の葉を見て下さい。所々虫に食われた痕跡がありませんか？。小さな幼虫が茎に付着して体液を吸っていたりしませんか？。害虫は見つけしだい、徹底的に取り除いてひねりつぶして下さい。かなり深刻な事態におちいつている場合、殺虫剤の使用もためらってはいけません。台風もこれからの時季は、頻繁にやってきます。気象情報をよく見て、危なそうな日には、突風を受ける前にバケツを丸ごと屋内に移動させておきましょう。出穂後の防風ネットの掛け方については、また次回に解説します。

赤米稲の茎をよくご覧になって下さい。一部分茎が膨れている所があります。指で軽くさわってみて下さい。そこにはもう稲穂の赤ちゃん（幼穂）がすでに宿っているのです。9月の声を聞くや否や、幼穂は急激に成長して茎のてっぺんから顔を出し、ただちに開花を始めます。赤米作りも、もう一步でゴールインです。ようやくここまでやってきました。今までの努力が報われるのは、もうすぐです。細心の注意を払いながら、最後の追い込みに入りましょう。

おしらせ

●五小の種まきが新聞報道されました

6月2日（木）におこなわれた国分寺市立第五小学校の赤米種まきのことが、新聞に報道されました。掲載紙は『読売新聞』6月3日号朝刊多摩版です。掲載記事をそのまま次ページに転載しておきます。

●国分寺五小で田植えがおこなわれました

国分寺市立第五小学校では6月9日（金）、校内にあるミニ田んぼで、5年生による赤米稲の田植えがおこなわれました（写真参照）。このミニ田んぼは、児童の足洗い場として用いられていた古いコンクリート槽を再利用したもので、土と水を入れて小規模なビオトープ田んぼに作り変えたものです。昨年、ここで初めて水稻方式での赤米栽培がおこなわれましたが、今年は2年目になります。武蔵国分寺跡の赤米畑とあわせ、児童らは水稻・陸稲の両方式での稲作体験ができるようになっています。田植えにあたっては、国分寺赤米会の皆さんが、田んぼの耕起や整備を事前

畑で赤米の種もみをまく児童（2日、国分寺市で）



国分寺赤米 大きく育て

児童ら90人種もみまき

古代米の一種「武蔵国分寺種赤米」を栽培する国分寺市の畑で2日、種もみをまく農作業体験会が開かれ、市立第五小の5年生の児童ら約90人が参加した。

赤米は縄文時代に外国から日本に伝わり、江戸時代までは食卓に並んでいたが、明治以降はほぼ姿を消した。同市では1997年

に畑で赤米の種もみが見つかった。以来、農家などが保存や普及に取り組んでいる。

この日の体験会の会場は、武蔵国分寺跡近くにある約2300平方メートルの畑。児童は市民らでつくる「国分寺赤米会」の指導を受けながら、ペットボトルの先端を使って土に丸い穴を開け、種もみを約10粒ずつ入

れたあとは、鳥に食べられないよう土を入念にかぶせていた。

秋には稲刈り体験も行われ、参加した城地美幸さん（11）は「成長する姿を見るのが楽しみ。収穫したお米を早く食べてみたい」と心待ちにしていた。

におこなっており、6月9日の田植えの当日にも、会員数名が奉仕して、児童らの指導にあたられました。

この日の朝、赤米会の会員10名が五小に駆けつけ、田植えの準備にあたります。史跡畑で育成中の赤米稲のプランター苗、カセット苗が五小まで運ばれ、ミニ田んぼの水位調整がおこなわれました。午前9時半からの、2時間目の授業時間を用いての校内田植えがいよいよ始まりが始まり、まずは5年1組の児童らが教室から出てきて、上履きと靴下を脱ぎ、裸足になります。児童らは今日の田植えに備えて、男児はみな半ズボン姿、女児は短めのスカートやキュロット姿で登校しています。赤米会や担任教員による説明の後、さっそく班ごとに田んぼの泥の中に足を踏み入れます。

児童らは、「水が冷たい」、「ドロドロして気持ち悪い」、「泥が深い。これじゃ底なし沼だ!」などと言って大騒ぎです。しかし苗を手渡され、ていねいにそれを植え付けていきますと、今度は「おもしろい」、

「泥んこ遊びみたいで楽しい」

と歓声をあげ、生まれて初めて経験する田植えを、みんなで楽しんでいました。苗を植え終わって田から揚げた児童らは、膝から下が泥で真っ黒になっており、まるで黒いハイソックスを履いているかのようで、みんなで

国分寺五小の校内にあるビオトープ水田で、5年生3クラスによる田植えがおこなわれました（6月9日）



ミニ田んぼにはきれいに早苗が並びました



大笑いです。すぐに水道で泥を洗い流し、全員整列すると、まだ少し時間が余っているので、先生が「もう一回やってみたい人！」とおっしゃると、ほとんど全員が「は〜い！」と手を挙げました。せっかく足を洗ったのに、誰もが急いでまた靴下を脱いで、再び田んぼの中に入っていました。本当にみんな元気なものです。

最後に田植え体験の感想をたずねてみると、「テレビで見たことがあるけど、自分でやってみると、とてもおもしろかった」とか、「お米がどうやって作られているのかが、よくわかった」とか、児童らは次々と発言し、赤米会の大人たちも、「そう、よかったね！」と応えていました。あっという間に 45 分間

の体験授業が終わり、引き続いて3時間目になって、今度は5年2組、その次の4時間目には5年3組がやってきて、次々と田植えをおこないました。こうして3クラスの田植えが11時半までに無事終わり、赤米会も校庭を引きあげます。五小の校庭はアジサイやクマシデが花盛りでした。

●龍神瑞穂さんの赤米報告

国分寺赤米会会長の龍神瑞穂さんが、6月2日(木)におこなわれた国分寺市立第五小学校の赤米種まきについて、報告をまた書いて下さいました。以下にそれを転載しておきますが、掲載誌は国分寺市環境ひろば・国分寺市の会報(WEB版)である『環境ひろば

国分寺』第166号(2022年6月19日発)です。

●今年の赤米畑の雑草の状況

東京都国分寺市の武蔵国分寺跡地にある赤米畑の、本年の雑草の生育状況について、東京赤米研究会が簡単な植生調査をおこなっておりますので、その実態を以下に報告しておきます。調査日は本年6月17日(金)で、トラクターによる全面耕耘後の、これから始まる定期的除草作業の直前の現状が、次表に示されています。雑草群落の種構成上、トップを占めるのは、相変わらず外来種のハキダメギク(キク科)で、被度2~3・群度2~3を記録していますが、同じ条件下で調べられ

環境ひろば国分寺

発行 国分寺市環境ひろば
国分寺市

第166号 令和4年6月19日

【武蔵国分寺赤米(あかこめ) 市立第五小学校児童による種まき】



今年も、いくつかのグループによる赤米の栽培が始まっています。市立第五小学校でも国分寺赤米会の支援のもとで、五年生の授業の一環として校外の農地での赤米づくりが始まりました。

土壌の pH 調整や切りわらの散布、近くの農家のご厚意によるトラクターでの耕うん、畝立てなどの準備を経て、6月2日、3組87人の児童が種まきを体験しました。各組4~5人の班(全部で18班)に分かれて、ペットボトルで印をつけ(穴をあけて)、そこに少し芽出しをした種籾をまいていきました。作業は短時間で終わりましたが、ほとんどの児童にとっては、初めての経験、目を輝かせ、大感激のひと時でした。この後、9日には校庭のミニ田んぼでの田植え、7月には赤米の由来や歴史、稲作などについての授業も予定されています。そして10月には、昔の農具なども使った稲刈りや脱穀の体験、さらに給食での試食と続きます。これら一連の学習を通して、日本人の食や文化の原点であるお米や稲作について深い学びが期待されます。

(環境ひろば会員 龍神瑞穂)

た一昨年のデータ（本誌 282 号参照）と比べれば、その勢力比は明らかに後退しており、4 年間にわたる土作りと、粘り強く継続されてきた除草作業の成果が現れています。

〔赤米畑内の雑草群落植生調査結果〕

調査地点	①	②
コードNo.	161	162
調査面積 (m)	2×2	2×2
全植被率 (%)	25	25
草本層草高 (m)	0～0.1	0～0.1
出現種数	8	9
ハキダメギク	3・3	2・2
オヒシバ	2・2	1・2
スギナ	1・2	1・2
コニシキソウ	1・2	＋・1
カヤツリグサ	1・2	1・2
オオノゲシ	1・1	＋・1
カタバミ	＋・1	1・1
スベリヒユ		1・2
アメリカイヌホオズキ	＋・1	＋・1

注) 調査日：2022 年 6 月 17 日。

私にとっては、最も誇らしいお祝品なので、このような事が出来たのも御指導のおかげと、感謝申し上げます。（追伸）絵ハガキの中にも赤米がおります（6/12：東京都国分寺市）。



『赤米ニュース』第 300 号記念報告

赤米の利活用(V)

長沢 利明

(4) 小中学校での栽培学習・つづき

浜口さんが当時、担任を受け持っておられたクラスの児童たちからはこの頃、私のところへ赤米に関する質問や相談の手紙が頻繁に寄せられるようになり、私は一生懸命に返事を書き送ったものです。小学生にもわかるように、極力やさしい言い回しで回答を書くのには、とても苦勞をしましたが、とても意義のある手紙のやりとりだったと思っております。平城京跡から出土した赤米木簡のレプリカを私が自分で作り、赤塚小学校まで送ってあげたことなどもありました。

浜口さんの取り組みは、教育界でも注目されるようになり、いろいろなところでその実践が取り上げられ[長沢 2001:pp. 8-11]、浜口さん自身もまた、たくさんの報告を自らまとめ

おたより

●種子島種、順調です（高橋寿子）

梅雨の季節になりました。今年は種子島種を分けて頂きましたが、今 20 cm 前後の背丈になりました。強雨や雷雨にめげず、涼しい顔をしてゆれています。この先、どんな風に育って行くか楽しみです。新型コロナが少しおさまり、やっとお祝をしたい友人と会うことが出来、大切にとって置いた古代米を白米にまぜて炊き、小さなおにぎりにして柿若葉に一つずつ包み、持参し、大変喜ばれました。

写真6 小学生による赤米種まき（東京都国分寺市）



写真7 小学生による赤米稲刈り（東京都国分寺市）



ておられるのですが[浜口, 2003:p. 71;板橋区立稲荷台小学校（編）, 1999:pp. 20-21]、それらを読んだ東京周辺の小学校の教員たちも続々とあとに続くようになったのは、まことに素晴らしいことでした。近年では武蔵国分寺種赤米の発見地である、東京都国分寺市内の小学校でさかんに赤米栽培がなされるようになりしましたが、皆さんもよくご存じの通りです（写真6～7）。

それとともに、小学校での赤米栽培に関するさまざまな問題点もまた、指摘されるようになってきています。たとえば、いわゆる「夏休み問題」というものがあり、学校に児童らがいない夏場のバケツ稲の管理がおろそかになって、水やりが足りずに稲が枯れてしまっ

たりすること、早生種の赤米稲では7月末に早くも開花期を迎えてしまい、せっかく花が咲いたのに子供らに見てもらえないこと、などなどがあります。畑での陸稲栽培をおこなう場合、日照りの影響を受けやすく、水稻栽培に比べて稲の生育が安定しないということなどもあって、難しい問題をかかえてもいるのです。けれども皆で知恵を出し合い、創意工夫を続けていくならば、それらの問題もいつかはひとつひとつ、解決していくことができるに違いないと、私は思っています。

（5）試食体験と食育

小学校での食育ということも、今日ではとても大切なテーマとなっています。（つづく）

〔表紙解説〕 国分寺市の年中行事⑧—戸倉満福寺の施餓鬼法会—

8月の月遅れ盆の直前の頃、各寺院ではいっせいに施餓鬼（せがき）法会がおこなわれるが、俗に「お施餓鬼」と呼ばれている。施餓鬼とは読んで字のごとく、「餓鬼に施す」という意味で、この季節になると先祖霊とともにあの世からこの世へとやってくる、餓鬼精霊や無縁仏らに対し、ほどこしを与えるための、それは仏教儀礼なのであった。盂蘭盆（うらんぼん）を迎えるにあたっては、家々に帰ってくる御先祖様の霊のみならず、ともにやってくる餓鬼仏たちも同じように、供養してやらなければならないとされていた。寺の本堂入口には、餓鬼仏への供物を並べた祭壇を外に向けて設け、青竹や紙旗などもたくさん飾られる。住職はこの時だけは御本尊に背を向けて、外から飛来してくる餓鬼仏に対し、今からお前たちにもほどこしを与えるから集まりなさい、と呼びかける。施餓鬼法会とは本来、そうした趣旨の行事なのであったが、現在では主として、檀信徒の新仏供養のための法要となっている。